

空飛ぶお台場プロジェクト

棚橋 和正^{*1}
岡田 義之^{*2}
新山 裕之^{*3}
柳澤 恵子^{*4}
桑原 敦^{*5}
東 宏乃^{*6}

一始まったばかりです。お台場から発信する、
私たち”21世紀の共育”への願い

キーワード：1) お台場 2) 共生 3) まち育て
4) 子どもを育む 5) 未来都市

1. はじめに

平成8年4月臨海副都心の第一期始動期とともに、街人もすべてが新しく始まった街「お台場」¹⁾。子どもが今、置かれている状況、浸食された子どもの世界を、視覚的にも象徴している街だ。子どもが住んでいる超高層住宅のドアを一步出れば、そこは生活感のないリゾート感覚の街である。

子どもたちにとって生活空間は限定され、物理的にも、精神的にも遊べる空間がほとんど無い。一方、日本で最先端のサイバー基地としてのインフラが整備され、さながら未来都市である。雑踏の新橋からゆりかもめに乗り、芝浦のループ橋を回ってレインボーブリッジを渡りはじめると、キャッチコピーの「東京都港区海外」のごとく別世界に行く気持ちになるところである。

そして現在、「お台場」は、東京でもっともトレンドイースポットとして、夏には東京ディズニーランドを100万人以上も上回る人出で賑わう街となっている。

「空飛ぶお台場プロジェクト」は、そのような街お台場で、地域、家庭、そして学校・園等を有機的にコーディネートする場をつくり、子どもを育む新たな状況（関係性）をビジョンを持って創り出すために立ち上げたプロジェクトである。

このプロジェクトは、まだ始まったばかりである。そこで、今回はプロジェクトを立ち上げるまでの経緯及びこれまでの活動報告と今後の方向性を述べる。

2. プロジェクト、立ち上げまでの経緯

2.1 港陽小学校の取り組み

開校した当初、初めて出会った子どもたちの顔には、不安の表情が表れていた。120人の子どもたちは全員が転校生である。教師も全員、転任である。すべての子どもが、誰一人知っている人がいない新しい街と集団のなかに置かれたのである。このような子どもの置かれた状況を前に、学校では、子どもが「他との関係性の中で自分を見いだす」ことを指導のねらいとした。

一つは、お台場という地域にある学校としての教育、特に「共生」をテーマとして実践・研究することである。もう一つは、子どもたちが新しい街お台場を自分たちの街と感じるような帰属意識を培うことである。

2.1.1 「共生教育」の実践と研究

2.1.1.1 1年目の取り組み

まず、学校では「子ども理解」と「お台場の環境と子ども」の研修を深めた。具体的には、教師によるKJ法やコミュニティ心理、教育社会学、異文化間教育の専門家など数人に、お台場に来てもらってアドバイスを受けた。以下は、学校だよりに掲載したものである。

平成9年1月

昨年12月、友人が港陽小に来ました。彼は現在慶応大学と東京学芸大学で心理学を講義しています。

以前、「4月から臨海副都心に新しく開校した港陽小に勤務しているが、お台場の地域は住民を含めて、すべてが新しいリゾート感覚の大人の街であり、しかも生活空間が限定され、子どもの遊ぶ場所がほとんどない。そのような環境と子どものこころの関係を一度専門家の立場からアドバイスしてくれないか」と話していたので私を訪ねて来た訳です。

彼のアドバイスによれば、「今までの人生で様々なことを経験してきている多くの大人には、このリゾート的な生活感のない街の美しさは、そのまま見えるままに心に映ってもさほど問題はない。しかし、年齢にもよるが、子どもにとっては、美しい風景の街でも物理的に、そして精神的にも遊べる空間がない場合は、学校や家庭で子どもに様々な体験を意図的にさせることが、子どものこころの世界を広げるためには大切だろう。」とのことでした。

学校の教育は当然のごとく、その学校がある地域空間、環境をぬきにはありえません。友人のアドバイスで、港陽小では多様な体験を持つことができる教育の大切さをより一層感じた次第です。

2.1.1.2 2年目・3年目の取り組み

1年目を踏まえて、「異文化共生教育」をテーマに実践・研究を行った。お台場というすべてが新しい街では子どもにとって、人も環境もすべてが初めての出会いであり、それはまぎれもなく自分とは異なる人や文化と「共生」していくことに他ならない。

そこで、港陽小では、「共生」を『「環境との共生」「他者との共生」、そして「自己との共生』』としてとらえた。その中で、特にありのままの自分を受け入れて「いろいろな欠点もあるけど、私も結構いいところもある」「結

構私もできるんだ」という自己肯定的な実感を持たせ、そして自己実現をめざすために「自己と共生」できる子どもの育成を図る実践・研究に取り組んだ。

2.1.2 帰属意識を培うために

お台場に在住・在勤の方、誰でもが参加できるコミュニティの運動会、音楽会、展示会を開催した。「学校が、地域に働きかけよう。コミュニティづくりの一端を担おう」との考えである。このようなコミュニティづくりの試みで、子どもたちに、このお台場の街は、学校も今までとは違うと感じさせたいと考えた。

参加呼びかけプリント 平成9年9月

昨年4月に始動した臨海副都心の私たちの街「お台場」は、1年を過ぎた今、キャッチコピーの「東京都港区海外」のごとく、トレンドドラマの舞台の様相を呈しています。そのような街に、臨海副都心唯一の小学校として昨年4月に開校した港陽小学校は、開校以来「港陽 お台場 コミュニティ」をスローガンに、学校が新しい街のコミュニティづくりにある一定の役割を果たそうと取り組んできました。

その一つとして、学校行事に地域の方々の参加を呼びかけ、港区海外で「村の運動会」「村の音楽会」「村の展示会」を開催しようと呼びかけています。運動会は、昨年の第1回から保護者以外の地域の方や企業に参加を呼びかけ、その結果ホテル日航東京など4チームが参加して綱引きを行いました。まだ、お台場に移転していなかったニッポン放送は、綱引きの模様を全国に実況中継してくれました。

そこで今年度は、運動会だけではなく学芸発表会、展示会にも広く参加を呼びかけ、さらにお台場コミュニティの形成に一役と考えています。学芸発表会は、午前中で終わります。そこで午後、地域の方や企業の方に参加を呼びかけ、合唱や器楽演奏などでプログラムする音楽会を開催しよう、展示会にも自由に出品していただこうと考えています。運動会が、学芸発表会がそして展示会が学校、保護者だけではなく、地域の方や企業の方にも楽しみにしてもらえらる「お台場コミュニティの祭り」になればと願っています。

すべてが新しく今ももっともトレンドな街・お台場で、学校を舞台に「村の祭り」が行われる。想像しても楽しいとは思いませんか。そのことが、ここお台場の街の新しい地域社会の創生とともに、お台場に住む子どもを「地域と家庭と学校とで育む関係性」を築く第一歩と考えています。ぜひ、「港陽 お台場 コミュニティ」にご参加ください。

3. 「空飛ぶお台場プロジェクト」準備会の立ち上げ

港陽小は開校以来、お台場という地域にある学校として、様々なことに取り組んできました。しかしながら、学校だけでできることは限られている。そこで、地域、家庭、そして学校を有機的にコーディネートする組織をつくり、子どもを育む新たな状況（関係性）を、ビジョンを

持って創り出すことが重要と考えた。

しかしながら、このプロジェクトは、学校・園の教員や保護者、地域の人だけで立ち上げるには、かなり無理がある。子どもや教育、そしてコミュニティづくりの専門家も参加してもらうことが不可欠と考えた。

そこで、子どもや文化に関するの自主研究グループの「トクトクの会」²⁾の定例会で約1年間にわたり、このプロジェクトに関して協議した。その結果、トクトクの会のメンバー3名が手弁当で関わることになり、教員、保護者、地域の人とともに、プロジェクトの準備会を立ち上げることができた。プロジェクトのネーミングは、次の4つの願いを込めて「空飛ぶお台場」とした。

①地域として誇れるもの「海と空」・「太陽」

これは状況の厳しさより、より積極面を前に打ち出すためだ。

②「飛ぶ」=人や命とのつながり・循環をイメージ

これは、閉塞ではなく、よい意味での軽やかさを示すものである。

③子どもをめぐる状況を地域やネットワーク全体で

これは、団体の設立を目指すのではなく、あくまでもコミュニティづくりをめざす「プロジェクト」である。

④お台場の空から港の対岸、日本の教育現場へ

これは21世紀の日本とアジア・世界との共生である。

3.2 準備会合の定例化

平成11年7月に、第1回の準備会を開催した。参加メンバーは、これまでの「港陽 お台場 コミュニティ」などに関わってきたお台場住民の方15名、小学校・幼稚園・保育園・児童館など教育関係10名、トクトクの会3名の計28名。学校など教育関係者は、それぞれの組織を代表しての参加ではなく、すべて個人の意志での参加を前提とした。

第1回準備会では、別頁の図をもとに、プロジェクトのイメージの共有化を図った。それをもとに、第2回以降2ヶ月に1回、計5回行われた準備会は、それぞれ家庭、地域、そして学校に関するの現状把握から議論を始め、課題の共有や解決の糸口などについて話し合い、活動の方向性をさぐることにした。

3.2.1 お台場の現状把握

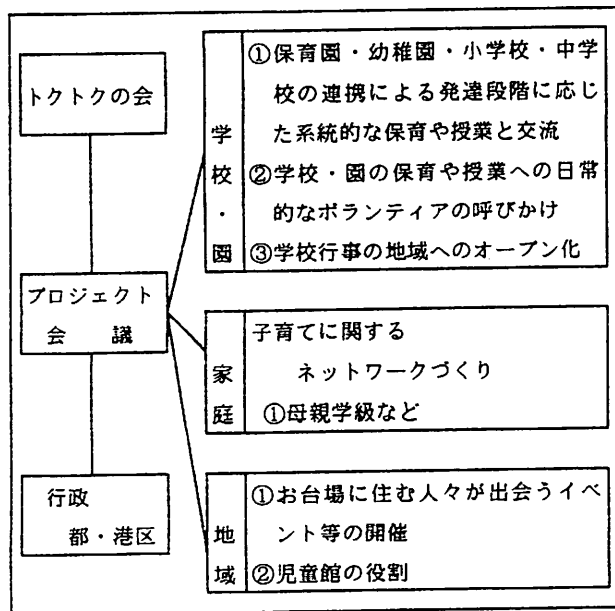
参加者、一人一人が、地域、家庭、そして学校に関して、感じていることをカードに書いて、発表し、KJ法でまとめた。

その結果、地域に関しては、①観光客に禁止されていることは、住民にも禁止されている。具体的には、キャッチボール、砂浜での花火、バーベキューなどの火気の使用や遊泳及び魚介類の採取などが禁止されている。②テレビのトレンドドラマの舞台のようなリアリティのない人工の街に対する不安がある。③単調で人工的な公園。④超高層の住宅のドアを一歩外にできれば、観光客が

集う世界であるなど、子どもや大人が憩うことのできる生活空間がない。⑤図書館などの文化的環境がない。⑥生活に密着した多様な店などがなく、一つのスーパーで毎日の買い物をしなくてははいけない。⑦真空吸引ゴミ回収や電磁器の使用などをはじめ近代的すぎて、生活の臭いが欠如している。⑧病院がない。以上のように孤立した生活空間としてのお台場で、子どもを育むことのできる不安が強いことがわかった。

家庭に関しては、①親が子どもに過干渉になる。②親同士の関係も息苦しくなる。③お台場に来る以前と後を常に比較してしまう。④若い世代が多いので、子育ての悩みなどを相談できる人がいない。など限られた狭い生活空間の中で起こる課題が多く出された。

学校に関しては、①学校が文化の中心となるべきだ。②気軽に行ける雰囲気をつくってほしい。③お台場にある学校としての特色を生かした教育をしてほしい。など地域の中で学校が中心的な役割を果たすことへの要望が大半を占めた。



3. 2. 2 課題の共有から解決への糸口を探る

準備会の参加者の多くは、今まで地域の活動に参加したことがなかった。また、事情さえ許せば、すぐにでも引越したという人が何人もいた。しかし、個々人に根ざした悩みや危機感など、他の人も同じように悩んでいることを知り、それらを共有することで不安が解消し、その結果、参加者に何かやろうという気持ちや意識が強くなり、お台場で生活する者同士として、よりよい人間関係を築きたいと願うようになった。行政などにも提案して、共に地域の共同体をつくって、子どもにとっても大人にとっても暮らしやすい街にしていけるために具体的な活動を考え、プロジェクトとしてやっていく意義が確認できた。その後、グループ討議などを経て、プロジェクトとしての方向性を決定した。

3. 2. 3 プロジェクトでめざすもの

お台場で子どもを育むことのできる現状を認識した上で、大事なことは、無い、欠けている、十分でない、などのマイナス面を発想の転換でプラスに転じ、みんなでチャレンジする姿勢を持ち続けることが大切と考えた。

そして、「文化がない」のであれば、現代に生きた文化をお台場に即して自分たちで「発見」「創造」していこう、「祭り」などのイベントを開催して生きた文化を再現しよう、「自然が本当はない?」、もう一度お台場の自然を見つめ直して、自分たちで発見しようというような発想で転換を図っていった。

「空飛ぶお台場プロジェクト」は、このような考えで、子どもを育む環境を大人と子どもが協力し、外の世界ともネットワークしながら、ともに楽しく発見する試みであり、お台場を「楽しく命あふれる多様なまち」とするとともに、21世紀の「共育」の先進地となることをめざすことになった。具体的には、①お台場という地域にある学校として、学校・園としてのあり方を探る。②2002年の総合的な学習のカリキュラム化を見据え、地域と連携して組み立てる。③それを裏打ちするお台場らしい地域の教育の理念を探り、具体的に実践する。④住民が主体であり、大人ばかりでなく子どもも活動の立案段階から関わろうとする発想を大切にする。⑤活動や人の輪をつくりながら発信（祭りやホームページ）し、他の地域ともつながっていくことを中心に取り組むことにした。

4. プロジェクト、立ち上げ以後の活動

5回の準備会を経て、平成12年4月に「プロジェクト会議」を発足。以後定例会を月に1回開催し、以下の活動に取り組んだ。

4. 1 地域の取り組み

「出会い・つながり・笑い」をキャッチフレーズに「テント村集會」「空飛ぶテント村・ティビ」「楽しく、自分たちの、まち育て」「お台場・コミュニティフェスタ」のイベント等を開催した。

イベントのお知らせプリントは、全戸の郵便受けに配布して、イベントの開催を知らせた。

4. 1. 1 「テント村集會」

日時 平成12年5月20日(土) 16:00 場所 港区立こいのせしほ公園

プロジェクトとしての初めてのイベント。全体の集い（東京大学助教授 汐見稔幸さんのお話「お台場の環境と子育て」）とテントの集い（お台場やみ鍋をたべましょう。子どもの遊び道具をリサイクルしませんか）の二部構成で計画した。

「レインボー公園に、複数のテントが立ち並びます。そのテントでは、ちょっとしたパフォーマンスが行われます。楽しくコミュニケーションしましょう。」と呼びかけた。当日は、あいにく雨のため室内でのイベントに

なったが、200名ほどの人が参加し、熱心に話を聞いたり、やみ鍋やわた菓子を食べたりして出会いと交流を楽しむことができた。また当日は中学生も多数参加し、やみ鍋づくりなどに積極的に関わった。

4.1.2 「空飛ぶ・テント村ティビ」

日時 平成12年7月23日(土) 13:00 場所 比叡の森公園・レインボー公園

テント村ティビは、室内と屋外の二部構成で行った。室内では「お台場の環境と子育て—地域・家庭・学校が有機的に連携して」と題して、コミュニティカウンセラーの三沢直子さんと東京大学助教授の汐見稔幸さんの対談及び学校・園・児童館・地域等の取り組みを報告するシンポジウム。屋外では、テントに集う内容。

全戸配布したお知らせプリントのコピー

・お台場には何がある？ 広い空 青い海 さわやかな風外に出て何かをしよう！

・「空飛ぶお台場プロジェクト」って、何？

子どもをみんなで育もう！ お台場の良さをみんなで発見！ 大人も子どもも地域で楽しもう！ そんな願いをもった人たち（住民、お台場の子ども達に関わる人…学校・幼稚園・保育園・児童館やボランティアなど）が立場を越えて、何かをしようと集まった出会いとつながりの場です。モットーは、

○誰でもいつでも参加 OK ○子どもたちが主人公になれる活動を ○人と心とものの循環 ○特定の政治・宗教に偏らない ○楽しく・気楽に・息の長い活動を

・幼稚園のみんなの部屋を託児もします。お子さん連れて気軽にお出かけください。

「空飛ぶテント村・ティビ」手作りコーナーいっぱい

【オープニング・ミニ・コンサート】エレクトーン演奏 生貝孝さん【テントがみんなの遊び場】風のエネルギーを取り出そう・風で飛ばそう・折り紙で飛ばそう・楽器を付けて飛ばそう・レインボー公園の自然を飛ばそう【出会いとつながりのしゃべり場】10代のしゃべり場・大人のしゃべり場・リサイクルコーナー・特設10代しゃべり場【お腹がすいたら…おいしい食べ場】かき氷屋・わたあめ屋・パンダカレー屋・お台場カレー屋【エンディング・イベント】

・手話で歌おう「翼をください」エレクトーン演奏 生貝孝さん・宮沢賢治のひとり語り「よだかの星」林洋子さん(女優・クラシックの会主宰・第4回イート・アート・フェスティバル)

当日は、天候にも恵まれ予定通りレインボー公園でのテント村を行うことができた。公園には12のテントが張られて様々なパフォーマンスが行われ、400名ほどの参加者も、お台場に住む人との出会いを楽しんだ。エンディング・イベントの宮沢賢治の一人語り。すっかり暗くなったレインボー公園の芝生を舞台に、スポット照明に照らされた林さんの語りは、幼児も身じろぎもせず聞くほどのもの。「人工的な街お台場と宮沢賢治」空飛ぶお台場プロジェクトにとって象徴的な組み合わせだった。

4.1.3 「楽しく、自分たちの、まち育て」

日時 平成12年10月28日(土) 19:00 場所 港区立台場保育園ホール

まちづくり講師と呼ばれている千葉大学教授の延藤安弘さんの幻燈と台場住民の生貝孝・悦子さんのエレクトーン・ピアノ演奏で「まち育て」の楽しいハーモニーを奏でるイベント。

このイベントは、テント村・ティビに参加していた方の熱意で実現した。8月のサマーカレッジで延藤さんの講演を聞いて「これぞ、空飛ぶお台場に通じるもの」と感じ、講演終了後延藤さんに面会。その思いを伝えられたプロジェクト会議が企画した。

幻燈プログラム

楽しいまち育て・子育てへの思いをふくらませる

- 1 しあわせってなあに？ チャールズ・ジュリアン(英)
- 2 プラムおじさんの楽園 エリザベト・トリビッチ(英)
- 3 身近な環境のタカラを表現する まちづくりコンクール(鶴島県いわき市)
- 4 タンケン・ハッケン・ホットケン
千歳・三善の現状と感動を布絵に表現する(船橋市)
- 5 校庭にピオトープや井戸をつくる
最も子どもも先生も輝くコミュニティ(習志野市立小学校)
- 6 冒険遊び場づくり 羽根木アレイパーク(世田谷区千代田)
- 7 子どもも自然も人工も共に育つ 江戸川区住宅コート(京都市)

40名ほどの参加者は、ユーモアのある話と演奏に「まち育ての楽しさ」を感じ、終了後のアンケートにもそのことを多くの方が記していた。そして、参加者から、数名が新たにプロジェクト会議のメンバーに加わった。

4.1.4 「お台場コミュニティ フェスタ」

日時 11月18日(土) 14:30 場所 港区立台場小学校体育館

これまで、学校・園の教員が主体となって実施していた「港陽・お台場・コミュニティ音楽会」を引き継いで開催した。これまでの音楽会も、第1回は、ボランティアの教員だけで開催したが、第2回は教員だけではなく、地域の方もスタッフに加わって開催していた。

「フェスタ」は、すべてをプロジェクトとして実施した。過去2回の実行委員長は小学校の校長だったが、今回は住民が務めた。

フェスタの出演者・スタッフ募集のプリント

人間は、運動で表現することが得意な人、音楽で表現することが得意な人、そして美術で表現することが得意な人など、様々なかたちで自己表現をしています。忙しい日々の中で自分を表現することを続けている方がたくさんいます。

新しい街「お台場」で音楽などを通して人と人との新たな出会いや触れ合いを楽しみませんか。ぜひ日頃からの成果をこの機会に発表してください。また「フェスタ」は、企画・運営する実行委員会のメンバーも募集し、すべてボランティアで創りあげます。音響・照明・道具係などをやってみようと思われの方ぜひご参加ください。

※出演される方でリハーサルを希望される方はお申ししてくだ

さい。日時の調整をさせていただきます。

※スタッフは、当日以外の打ち合わせは行いません。当日開始1時間前にお越しいただければ結構です。当日お渡します進行表に従って、臨機応変に楽しくやりましょう。

フェスタは、前回までとは異なり、すべてプロジェクトのイベントとしてで実施することの不安があった。これまでは、実行委員長である小学校の校長名で、出演者等の募集をした。パンフレットに「学校」をはずしたフェスタでは、どうだろうかとの懸念があった。結果的には、演目数は13。内容も、親子によるピアノ連弾、ジャズ、ギターソロ、三味線、シャンソン、エレクトーンとピアノのアンサンブル、和太鼓、踊り、そしてフェスタに向けて結成された40名によるゴスペルなど、多彩なものとなった。ゴスペルは、その後も練習を重ね、クリスマスにはお台場のレストランで初デビューを飾った。ゴスペルの参加者は募集した当初は数名だった。しかし、練習を重ねるにつれて、その楽しさが口コミで伝わり次々に参加者が増えて、最終的には40名ほどになった。様々な人々の出会いとつながりが広がった。

4.2 学校・園の取り組み

まず、保育園、幼稚園、小学校、それぞれの保育・授業実践をお互いが知ることから始めた。そして、現在は、教師間の意志の疎通を図ることがスムーズになり臨機応変に対応できる交流へと深まっている。

4.2.1 台場保育園の取り組み

台場保育園はお台場海浜公園のすぐ近く、まさに駅前型保育園である。高層住宅の二階にあり、コーティングされた土のない園庭は狭い。開園当初の78名の定員から住宅の増加に伴い2000年11月現在131名の定員になった。

<お散歩マップ>

人工的な街の中の保育園だが、目の前には紛れもない本物の海があり、林があり、草原がある。お台場では「自然がない」と言うが、保育園では、0歳児から5歳児までが毎日遊んでいる場所を記した「お散歩マップ」を作成した。年齢ごとの遊びの様子、子どもの発見、保育士の発見、様々な場所での収穫物、エピソードなどでつづっている。同じ年齢の子どもを持つ親にも伝えたく、テント村・テレビで紹介した。

<保育園で遊ぼう>

開園2年目に子育て支援事業として「保育園で遊ぼう」(仮称スタート)を開始。高層のビルの中で過ごしている親子を対象に、保育園の場を提供し、親同士の交流を深めたり、楽しめるように毎月実施している。募集すると、すぐに応募が殺到し、他の保育園と比べてダントツで上位の利用状況でありこの事業の必要度を感じる。今後も密室にこもりがちな子育て環境を救うべく親子参加の企画を盛り込んでいきたい。

4.2.2 にじのはし幼稚園の取り組み

<自然とのかかわりを大切にする保育>

お台場が子どもたちにとって心のふるさとなるために、身近な自然とのかかわりを重視している。隣接するレインボー公園の一部を草刈りをせずに残してもらい、園内の小さなビオトープと共にジャングルと呼んで、虫取りや探検ごっこなどで日常的な遊び場として使っている。また、第三台場を『わくわく島』と呼んで、探検に出かけている。葛のつるや木ノ実などをとってきてリースを作ったり、よもぎを摘んでよもぎ団子を作ったりして、身近な自然を生活に取り入れる工夫をしている。

<さまざまな人とかかわりを大切にする保育>

幼稚園にかかわる様々な人たちとかかわりやその人たちから得られる文化も大事にしている。それをコーディネートすることが幼稚園の大事な仕事と考えている。保護者の才能を発揮してもらおうと保育ボランティアを提案し、実施している。サークル活動も発足し、試行錯誤しつつも定着してきている。また、行事・遠足などを中心に子どもたちの遊びの世界に、保護者が楽しんで妖精や海賊などに化身してかかわってくれ、その動きが幼児の遊びの充実にもつながっている。

4.2.3 港陽小学校の取り組み

平成12年度から完全実施する総合的な学習に向けてその指導計画を作成するにあたって、子どもの実態をこれまで以上に客観的に把握するために描画調査を実施した。その結果、次の二つのことが浮き彫りとなった。まず、第一に、人間などが宙に浮いている絵を描く子が多い。第二に、現実と非現実が混合した絵や非現実の絵の割合が他の地域よりも多いことである。このことは、当初から懸念していたお台場の環境が要因の一つとして考えられる。学校としては、描画調査の結果をある程度予想していた。それ故、開校以来「お台場の環境が子どもに与える影響」を考えながら「お台場にある学校としての教育活動」を実践・研究してきた。そこで、これまで過去3年間の「共生」をテーマとした実践・研究や子どもが生きる時代認識をもとに、以下のような総合的な学習のテーマと内容を設定した。

テーマは、「共生」と「情報」。「共生」の内容は、自己肯定感を育むことで自己との共生を図る「表現」。共感性を育むことで他者との共生を図る「福祉・健康」。お台場という環境との共生を図るために帰属意識を高める「環境」。主に言語を通してコミュニケーション能力を高める「異文化理解」の4つである。「情報」の内容は、総合的な学習や教科・領域に活用できる情報処理能力を高める「コンピューター」である。

今年度は、移項処置として各学年35時間の実施で、「表現」と「環境」に取り組んだ。「表現」は、劇づくりであり、高学年になると演出をはじめすべての係りを子どもが担当してつくりあげた。「環境」は、お台場の街へ

の帰属意識を高めるために、3年は海、4年は生活、5年は自然、6年は歴史に取り組んだ。最終的には、それぞれの内容の実践が相互に関連し、スパイラル的に「共生」を促すことをねらいとしている。

4.3 台場児童館の取り組み

開設以来5年が経つ。まさに街と共に歩いて来たが、その間の子どもに関する問題もまた共有してきた。その中で、児童館の役割と直接関わる問題が二つある。

一つは、子どもの遊び場が少ない。このことは児童館を利用する子どもの数が、午後だけで130名を越える数字からも見てとれる。利用が多いことは、本来喜ばしいことだが、約500㎡という港区で最も小さな児童館にとって、限界を超えた人数である。一方「本当に子どもたちは、他の場所では遊べないのか?」。周囲の砂浜や緑の自然は確かに日常的には、遊びにくいようだが、いい意味で子どもの遊びや興味の幅を広げることに取り組んでいる。

もう一つは、中学生・高校生の居場所の問題である。思春期の子どもたちは安心して仲間と集える場が絶対に必要だが、限られた地域に住宅と観光地が密集したお台場では、そうした場所を確保することは難しい。本来は児童館の役割の一つであるが、日常的には前述の通りであり、行事や時間の設定でフォローしている。しかし、それだけでは解決できない課題である。

4.4 園・学校・児童館の交流

幼稚園(平成9年度より)・保育園(平成11年度より)の園児がそれぞれ月1回、小学校の図工室での粘土遊びを行っている。また、それぞれの保育や行事などで手紙のやりとりや、一緒に遊び、おやつなどを持ち寄って楽しい会食などを行っている。粘土遊びの帰りなどにも気軽に交流している。これらのことは、園児や保護者の小学校入学前の不安などの解消に役立っている。

児童館との交流による情報交換も日常化し、子ども理解を深めている。

5. おわりに

『都知事選挙争点の現場「臨海副都心」有権者の問い。見えない共存への道「暮らす街に?観光地?」未来都市というけれど…』(朝日新聞、平成11年4月)

『実験都市・お台場。いまのところ、遊びに来る人や仕事をする人ばかりが目立つ。街づくりも、そんなふうに進んでいる。暮らす人々のことは「ついで」のように

見える。』(7サビグラフィック・東京お台場四年目の夏)

暮らす人々のことが「ついで」の街づくりなんてあるの?。

『「実験都市・お台場」ここから「未来都市」における、子どもを育む状況づくりとコミュニティづくりに挑戦しよう。そして、発信しよう。』

空飛ぶお台場プロジェクトには、そのような「思い」を持った人々が集っている。また、そのような思いに共感した専門家の人々が活動を前に進める手助けをしてくれる。どこからも資金援助を受けていない活動は、すべてプロジェクト会議のメンバーの手弁当。そして、専門家の人々も手弁当で活動を支援してくれる。

「楽しく、自分たちの、まち育て」のイベントのように、思いがイベントを産み出し、思いが活動に参加する人の輪を広げた。「ゴスペル」が、ロコミで人の輪をひろげ、その名も「お台場・ゴスペル・シンガーズ」が結成され、フェスタの後も活動を続けている。準備会から1年半の活動は、そのような「思い」と、人と出会い、共に活動することの「楽しさ」で成り立った。

しかし、「空飛ぶお台場プロジェクト」が目指しているまち育てが、「思い」と「楽しさ」だけでできるものではない。子どもや大人が精神的にも、物理的にも遊べる空間などをつくりだすことは難しい。

今後は、これまでの「思い」と「楽しさ」を大切にしながら地道な活動をするとともに、「実験都市・お台場」「未来都市・お台場」で、「住民と街が共生するまち育て」の提案して、行政とともに進んでいくことが重要と考える。また、「空飛ぶお台場プロジェクト」に参加する人々が、人と出会い、つながり、そして、共に活動することで「まち育て」だけではなく、「自分育て」にしていくことが重要である。

<脚注>

1)「お台場海浜公園」駅前周辺に超高層住宅群(都・公・公) 平成13年1月現在、1573戸分の賃貸住宅(3月に280戸入居予定)・居住人口:約3881人、15歳以下の子ども数:約813人。学校・園在籍数・港区立港陽小学校(125名)中学校(57名)・にじのはし幼稚園(77名)・台場保育園(124名)

2)教育学の専門家や教員、弁護士、絵本・童話作家、ユネスコの識字教育専門家、開発教育・環境教育、演劇や語りの表現などにたずさわる者十数名を核として平成8年に発足。毎月1回の定例会を行い、子どもや文化についてサロン風に議論を重ねている。現在お台場プロジェクトには、汐見稔幸(東大助教授)、福澤郁文(元NPO法人代表、にじのはし幼稚園小・中学校の教員の子供)、東宏乃(元阪神、児童館の専門家)の3人が手弁当でかかわっている。

*2 台場住民

*5 港区立台場児童館 指導員

*3 港区立にじのはし幼稚園 教諭

*6 生涯教育コーディネーター

*4 港区立台場保育園 園長



*1 港区立港陽小学校 図工専科教諭

14年間の中学校美術教諭を経て小学校の図工専科。全国海外子女教育・国際理解教育研究協議会の事務局長として、教育の国際化を推進。現在図工専科としてプログラム学習「夢と共生」を開発し、実践している。